弟同士の交友
橋本綱常と西郷従道
～兄と同じく偉大な功績を残した二人～

橋本左内と西郷隆盛は将軍継嗣問題を巡る対応で交流を深め、隆盛が左内の手紙を自身が死ぬ間際まで持っていた逸話が残るなど親しい間柄でしたが、それぞれの弟、橋本綱常と西郷従道も親交があったといわれています。

綱常は、弘化2（1845）年6月、福井藩藩医の橋本家の四男に生まれます。兄左内と同じく儒学者吉田東篁に学びました。8歳で父と死別し、安政2（1855）年、11歳の時、左内が藩医を辞して福井藩御書院番になると、家業を継承し藩医になります。

一方、従道は、天保14（1843）年5月、隆盛の15歳年下の弟として生まれます。9歳のとき両親と死別し、兄隆盛を親代わりとして成長しました。

橋本綱常肖像
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

西郷従道肖像
（国立国会図書館蔵）

二人のつながりは、陸軍時代に始まります。綱常は、明治10（1877）年7月に陸軍軍医監・本病院に出仕後、軍医総監・軍医本部長、陸軍省医務局長と陸軍の軍医として地位を高めました。一方、従道は明治2（1869）年、山縣有朋と兵制研究のため渡欧（プロイセン、フランス、ロシア）。帰国後、兵部権大丞陸軍少将、陸軍大輔など出世し、明治11（1878）年には陸軍卿となります。西南戦争では兄に組せず、政府に留まりました。

二人には、こんな逸話が残されています。従道は自邸の引越しをした際、思いをこめて育てた大切な庭木を全て綱常に譲ることにしました。従道は平河町の綱常の家を訪れ、自ら庭師を指揮して植樹をさせたといわれています。当時、庭木を譲るということは、真に遠慮のない心の通じた交際をしていたということの表れでもありました。

その後、綱常は当代一の名医として知られるようになります。従道は綱常の診断をしばしば受けており、心身ともに良き理解者としてその関係は続いていきました。この他、伊藤博文や井上馨、山縣等も診察を受け、中には、あの左内の弟に会えると懐かしがって訪れる元勲もいたといいます。綱常は明治20（1887）年には、日本赤十字社病院の初代院長にもなっています。また、従道は明治27（1894）年に海軍大将となり、内閣総理大臣にも再三推される人物となりました。

明治期に近代日本の基礎固めを進めた二人。その功績が兄たちに引けをとらないだけに、兄と同様に親交があったことが不思議な縁に感じられるエピソードです。

関連史料・ゆかりの地

橋本左内生家跡

福井を代表する幕末の志士、橋本左内。現在、その生家跡には民家が建っていますが、左内の産湯に使われたという産湯井戸跡や、啓発録の石碑が今も残されています。弟の綱常も同じ地で生まれています。

【住所】福井市春山２丁目（福井鉄道仁愛女子高校駅より徒歩５分）

参考資料等　日本赤十字社病院編『橋本綱常先生』大空社

発行／福井県観光営業部ブランド営業課